

暮らすことで、地域とつながっていく

2021年、地域おこし協力隊農業担い手候補生として山北みかんの栽培を始めた漱一郎さん。用意してもらったみかん畑で、農家の先輩や指導者たちに教わりながら技術も覚えていきました。農作業に携わること自体が初めてで、四苦八苦しながらも、すべてが新鮮な毎日でした。

可奈子さんは移住して3年目まで仕事をしたのち、農家でのアルバイトや地域活動に参加したことで一気に地域との輪が広がっていきます。農業の仕事にも携わりながら、地域で多くの人に声をかけられ、自然と会話が生まれていきました。名前を覚えてもらい、何気ないやりとりを重ねるうちに、このまちでの居場所が少しずつ形になっていきます。

「最初は、移住者が住むことを地域の皆さんがどう思うかな？という不安ももちろんありました。でも実際はとても温かく皆が迎えてくれました」——地域の皆さんから「県外からみかんを作りに来てくれた人」として、声をかけられ、支えられる日々。みかん作りの技術だけでなく、人との関わり方や暮らし方

そのものも少しずつ学んでいきました。

そして、3年間の地域おこし協力隊の任期終了後、そのまま香南市でみかん農家として独り立ちしました。「自然相手の仕事なので、毎年状況は変わります。努力がそのまま結果になるとは限りませんが、だからこそやりがいがあります。百点満点にならないから、毎年本気になれるんです」と熱を込めます。



これからもこのまちで、家族とともに

移住して程なく、ふたりは結婚。最初の2年間は野市町でアパート暮らし。その翌年から、研修先が管理する畑の地主の持ち家である香我美町山北の一軒家に転居しました。そして2025年に双子を授かりました。育児に追われながらも毎日笑顔が絶えることはありません。

医療や子育て支援、便利な高規格道路、動物公園や海水浴場などのレジャー環境が揃い、ファミリー世代にはぴったりの香南市。「安心して暮らせるし、理想の生活ができて

いる」とふたりは口をそろえます。

「家から一歩踏み出すと、顔なじみの人と立ち話することも日常の風景になりました。近所の人から採れたての野菜や釣りたての魚を分けてもらったり、子どもたちに声をかけてもらったり。みかんの収穫なども多くの人たちに手伝ってもらっているのでも、地域全体が家族のような感覚に近いかも」。迎えられる側だったふたりは、今や地域の一員として溶け込んでいます。

この場所で頼れる人たちがいたから今の生活がある。だから、今度は自分たちが頼られる人にならないと。そう考えるふたりは「自分たちがしてもらったことを、これから移住してくる人たちにあげたい」と話してくれました。

ふたりで来たこのまちで家族ができ、つなぐ手はふたつ増えました。あこがれた生活は香南市で現実となり、家族の未来が広がっていきます。

小島家データベース

小島 漱一郎(31)
神奈川県出身
地域おこし協力隊(2021~2024)
2024年から
みかん農家として本格就農

可奈子(31)
いつき いおり
佐葵・伊菜(0)
ゆず[犬](3)
なつめ[猫](2)



2026年1月現在